制服の世界
THE UNIVERSE OF UNIFORMS
世界の制服

アメリカを身にまとったサンタクロース

葛野 浩昭
立教大学教授

街のクリスマスソング、電光イルミネーションに、心ときめく季節がやってきた。サンタを待つ子ならなおさらだ。サンタと言えば、あの服装。でも、なぜ？
誰も実物のサンタさんに会ったことはないはずなのに。

サンタの赤はコカ・コーラの色か？

サンタの衣装に関しては、今も「赤いロゴマークのコカ・コーラ社が、広告で赤いサンタを広めた」との噂を信じている人が少なくない。まずは、「サンタの国」として有名なフィンランドのサンタを見てみよう。黒いベルトや靴を身につけていない点、また、フィンランドの民族衣装を意識して上着に刺繍が入っている点など、わたしたちにお馴染みのコカ・コーラのサンタとは少し違う印象かも知れない。しかし、これでも基本的にはアメリカン・サンタといって良いだろう。

しかし、サンタや、そのモデルになったキリスト教の聖人ニコラウスは、コカ・コーラのサンタよりも遥かに前から、赤いガウンを着た姿で描かれることが多かった。

フィンランド、ロヴァニエミ市にある「サンタクロース村」のサンタ
フィンランドの北極圏北東部、耳の形をしたコルヴァ・トゥントゥリ（耳・丘）に住み、その大きな耳が世界中の子どもたちの願いを聞くという（提供・サンタクロース村オフィシャルサイト）

人気抜群の聖ニコラウス

子どもの守護聖人でもある聖ニコラウスは、ヨーロッパ各地で一二月六日（聖ニコラウスの日）に、子どもたちにプレゼントを届ける。古くから人気抜群の聖人であり、ヨーロッパ各地で彫像がつくられ、アルザス地域のガラス絵やロシア正教のイコン画などにもさかんに描かれたが、その多くは赤いガウンを着ている。わたしたちが思い描くサンタと違うところは、でっぷりと太ってはいないこと、手に司教杖を持っていること、塩漬け肉にして食べようとした肉屋から助けた三人の子どもたちが足元の桶のなかに立っていることなどだろうか。

聖ニコラウスが赤いガウンを着ることは、信者の幸福のために自分が流す血をあらわすともいわれる。また、ヨーロッパ北部の聖ニコラウス信仰には、キリスト教以前の北欧（ゲルマン）神話のオーディン（ヴォーダン）が隠れていて、太陽の運行をつかさどるオーディンが赤いマントを着て八本脚の神馬スレイプニールに乗ることも、聖ニコラウスやサンタの赤いガウンにつながっている（くわえて、サンタのそりを曳くトナカイは八頭である）。

赤いガウンは星条旗？

アメリカン・サンタは、オランダからの移民たちがニューヨーク（旧名ニューアムステルダム）へもたらした聖ニコラウス（シンタクラース）信仰から生まれた。文章のうえでは、一八二二年、神学者のC・C・ムーア（一七七九〜一八六三）が作ったとされる一篇の詩「聖ニコラスの訪問（A Visit from St. Nicholas〝別名〟'Twas the Night before Christmas）」が始まりだが、この詩には数多くの有名な画家たちが挿絵を描いてきた。なかでもサンタのイメージを決定的にしたのが、共和党をゾウ、民主党をロバで描いたことでも有名なT・ナスト（一八四〇〜一九〇二）であった。彼が雑誌『ハーパーズ・ウィークリー』や絵本に描き続けたサンタの第一号（一八六三年）は、上着が星の模様、ズボンはストライプ模様の、星条旗デザインの衣装を着ていた。白黒の絵だが、星条旗の赤色が意識されていたに違いない。カラー刷りの絵本などに彼が描いたサンタは、防寒用だろう、赤茶色の毛皮コートが多い。

アメリカの「制服」

ナストはナポレオン戦争後の大混乱のなかにあった中部ヨーロッパ、アルザス地域に生まれ、六歳でニューヨークへ移住した。彼にとっては、南北戦争で分裂するアメリカがひとつの国家へとまとまることが悲願であった。『ハーパーズ・ウィークリー』などを舞台に北軍の正義を訴え、リンカーンやグラントを英雄へと仕立てあげた。そんなナストが描いたサンタはアメリカの象徴であり、サンタの赤い衣装はアメリカという新しい国の「制服」だったといって良いだろう、コカ・コーラのサンタ以前から。

聖ニコラウスのガラス絵
19 世紀。フランスのアルザス地域。18 〜 19 世紀、社会の混乱のなかでアルザス地域では宗教的ガラス絵が人気を集めた

T・ナストのサンタ第１号
「SANTA CLAUS IN CAMP」。星条旗デザインの衣装を着たサンタの向こうには星条旗がたなびき、画面上部には「U S」の文字が躍る。『ハーパーズ・ウィークリー』1863 年 1 月 3 日号より

T・ナストのサンタ絵本
19 世紀後半に人気を集めたマクラフリン・ブラザーズ社の絵本シリーズの１冊。サンタは赤茶色の毛皮コートを着ている